

findings

「女性天皇」の容認度

社団法人 共同通信社
総合選挙センター次長 國井 正浩

はじめに

小泉純一郎首相の私的諮問機関「皇室典範に関する有識者会議」(座長・吉川弘之産業技術総合研究所理事長)は2005年1月25日、首相官邸で初会合を開き、女性天皇の是非などをめぐる本格的な論議をスタートさせた。初会合では「皇位継承の安定的維持」の観点から、今秋には具体案をまとめて提言する方針を確認。政府はこれを受け、来年の通常国会には皇室典範改正案を提出する構えだ。

皇位の継承については、憲法第2条で「世襲」とされ、皇室典範第1条で「皇位は、皇統に属する男系の男子が、これを継承する」と規定。現在の継承順位は 皇太子さま 秋篠宮さま 常陸宮さま 三笠宮さま 三笠宮寛仁さま 桂宮さま の順となる。

現行の皇室典範は、明治時代の大日本帝国憲法の考えを受け継いでおり、女性や女系の場合には継承資格がない。女性皇族は、天皇、皇族以外と結婚すると皇族の身分から離れる。

女性天皇を認める場合「男女を問わず第1子からとする」「男子を先にする」など、様々な考えが出ている。

「第1子からとする」ケースでは、納采の儀を終えて正式に婚約が調った紀宮さまを除くと 皇太子さま 皇太子家長女愛子さま 秋篠宮さま 秋篠宮家長女眞子さま 秋篠宮家二女佳子さま 常陸宮さま の順となる。

有識者会議の皇位継承に関する具体案のとりまとめにあたっては「国民の意思、平均的な国民の考えが前提となる」として、「世論」重視の必要性を強調する意見も少なくない。

「女性天皇」に関する世論調査

有識者会議での論議スタートをきっかけに、このところ各種メディアで女性天皇の是非をめぐる世論調査がたけなわとなっている。この中で、日本世論調査会(共同通信社と、その主要加盟社で構成する世論調査組織)は、1975年(昭和50年)12月から30年間にわたってこのテーマについての調査を継続している。「女性天皇」については、皇室に関する国民世論の定点調査として75年を皮切りに設問を開始、84年12月、87年12月、92年12月、98年4月、99年12月、2001年6月、03年6月、05年3月の9回を数え、北海道新聞社、河北新報社、新潟日報社、信濃毎日新聞社、静岡新聞社、中日新聞社、京都新聞社、神戸新聞社、山陽新聞社、中国新聞社、愛媛新聞社、高知新聞社、西日本新聞社、熊本日日新聞社、南日本新聞社など30数社に及びブロック紙、地方紙に掲載されている。

調査はすべて全国250地点、3,000サンプルを対象とする面接調査として実施している。

設問構成は、

問 あなたは、天皇は男子に限るべきだと思いますか、それとも女子がなってもよいと思いますか。次の中から1つだけお答えください。

- 1 男子に限るべきだ
- 2 女子が天皇になってもよい
- 3 特に関心がない
- 4 その他
- 5 分からない・無回答

98年に女性天皇が優位に

もっとも、女性天皇に対する論議が75年当初から高まっていたわけではない。75年秋には昭和天皇・皇后両陛下が初のご訪米。その年の暮れの調査時点ではご訪米に対する関心度は高かったものの、女性天皇問題については「女子がなってもよい」が31.9%と低い水準。「男子に限るべきだ」が54.7%だった。

以降、84年、87年、92年と「女子がなってもよい」は、26.8%、29.0%、32.5%と低迷して推移。一方の「男子に限るべきだ」は52.2%、51.6%、46.8%と漸減した。

大きな変化が表れたのは98年4月。「女子がなってもよい」が49.7%と半数を占め、「男子に限るべきだ」は30.6%。それまで優位に立っていた男子限定論者が女性天皇容認論者に逆転される結果となった。

この間、93年6月には皇太子さまと雅子さまのご結婚。以来、雅子さまには懐妊の兆しがないまま推移した。また、社会全般の流れ

としては、98年2月の通常国会施政方針演説で当時の橋本龍太郎首相が「男女が対等な立場で責任を担う社会の実現推進」を目的とする基本法案の99年提出方針を表明するなど、男女参画実現に向けた動きが顕在化し、男女平等の観点から「女性にも皇位継承権を認めるべきだ」とする議論が目立ってきた時期とも重なっている。

その後の99年、2001年、03年は「女子がなってもよい」が53.1%、71.2%、76.0%と上昇。半面「男子に限るべきだ」は23.6%、15.3%、9.6%と下降した。雅子さまの懐妊発表を受けた01年6月調査は「女子がなってもよい」が99年調査から急増しており、雅子さまが受け続けた男子出産プレッシャーに対する世論の同情の大きさをもうかがえる。

今秋に向けた有識者会議の論議入りを受けた今年3月調査では、「女子がなってもよい」が81.3%に達し、「男子に限るべきだ」は4.9%に過ぎなかった。

図1 女性天皇の容認度

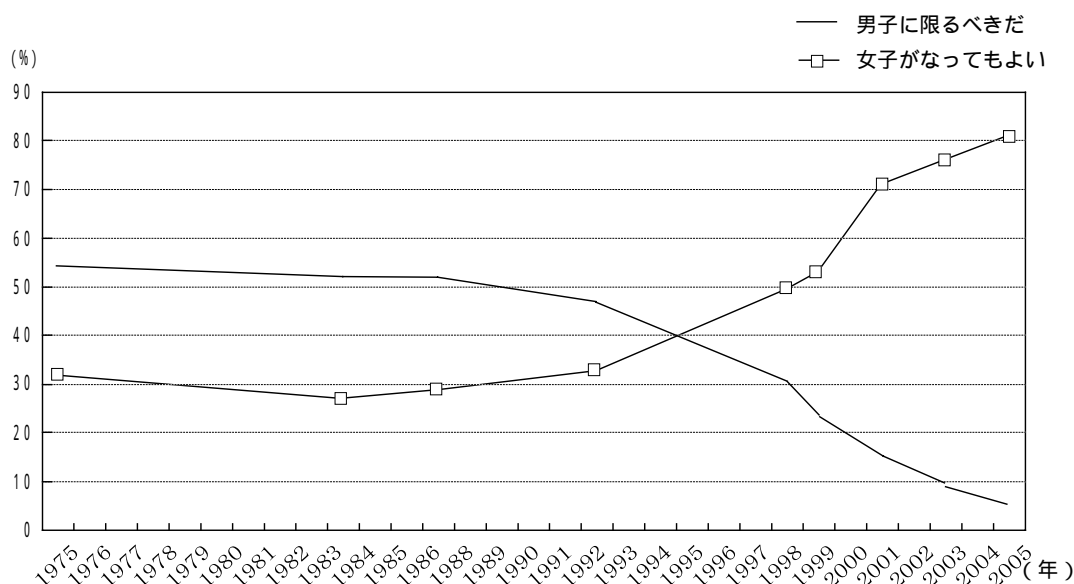


表1 世論調査結果から - 「男子に限るべきだ」(性別)

(%)

	1984年	1987年	1992年	1998年	1999年	2001年	2003年	2005年
男性	53.7	50.9	45.8	31.1	25.8	16.1	9.8	6.4
女性	50.9	52.1	47.8	30.1	21.5	14.6	9.4	3.5

表2 世論調査結果から - 「女子がなってもよい」(性別)

(%)

	1984年	1987年	1992年	1998年	1999年	2001年	2003年	2005年
男性	25.4	28.7	33.4	47.2	50.6	67.3	73.5	77.0
女性	28.2	29.2	31.6	52.1	55.6	74.7	78.4	85.4

過去の女性天皇

- 推古天皇
- 皇極天皇
- 斉明天皇(皇極天皇重祚)
- 持統天皇
- 元明天皇
- 元正天皇
- 孝謙天皇
- 称徳天皇(孝謙天皇重祚)
- 明正天皇
- 後桜町天皇

98年調査以降、「女子が天皇になってもよい」とする女性の回答は、男性の回答より5~8ポイントも高い。女性天皇の容認度アップが女性の支持にけん引されていることが示されよう。

もっとも、男性で「女子がなってもよい」の回答者を年代別で見ると99年調査で最多だったのは60代の59.2%。以降2001年、03年と60代が最多で、特に50代以上の熟年層で高水準を示した。「男女共同参画社会」を推進する指導的立場にある熟年層で女性天皇への容認度が高いとも言えそうだ。

「男女平等」の流れ

ここまで見たように、女性天皇の容認度は「時代の波」に突き動かされるように上昇している。この「時代の波」の中核となっているのは、もはや女性の社会進出が当たり前となってきた「男女平等」社会に向かう構造的な動きだ。この流れに抗いきれないと悟った政府も99年2月、国会に「男女共同参画社会基本法案」を提出。同年6月には同法が成立している。秋篠宮様が65年にお生まれになってから、男子皇族が誕生していない現実に対応する必要性があったものの、有識者会議の創設による皇族典範改正の動きには、男女平等の「時代の波」に沿う側面があることは否定できない。

また、「女子がなってもよい」と回答したのは84年調査で20代女性が最多の41.5%、次いで30代女性の33.3%。98年調査では30代女性が最多で65.9%、次いで多いのは40代女性の57.3%。01年調査で最多は40代女性の81.9%。05年調査では50代女性が最多で86.6%。これを見ると、84年当時の20代から30代女性がその後年齢を重ねていく中で、高い容認度をさらに広げているように見受けられて興味深い。

01年調査から顕著な容認度アップのもう一つ大きな要因には「お世継ぎ問題」のプレッシャーに対する同情の側面があることは否めない。

01年調査では、雅子さまの年代に近い女性

の30代、40代で「女子がなってもよい」が76.4%、81.9%と最多の水準。03年調査では女性の20代、30代、40代で80%台を示した。05年調査は女性の20代、40代、50代、60代で85%を超えた。

「皇室典範」は時代遅れ？

海外では1979年の国連総会で、女子差別撤廃条約が採択されたことをきっかけに、スウェーデン、オランダ、ベルギー、ノルウェーと欧州の王室で男女平等に継承する法改正が相次ぐことになった。欧州で現在、女王が君臨するのは英国、デンマーク、オランダの3カ国。

05年調査で「女子が天皇になってもよい」との回答が女性では85.4%、男性で77.0%といずれも75年調査以来の最高となった。特に男性は70歳以上で80%を超えた。このような高率は「お世継ぎ問題」で苦しむ雅子さまに対する同情ばかりではなく、欧州の王室から見ても立ち遅れている日本の「皇室典範」の現状を批判する気持ちが強く込められていると言えるかもしれない。

(了)

参考資料：主な出来事

1975	三木内閣	昭和天皇・皇后両陛下米国訪問
1976	三木内閣 福田内閣	
1977		
1978	福田内閣 大平内閣	
1979		
1980	大平内閣 鈴木内閣	
1981		
1982	鈴木内閣 中曽根内閣	
1983		
1984		
1985		
1986		
1987	中曽根内閣 竹下内閣	昭和天皇手術入院
1988		昭和天皇が吐血、病状悪化
1989	竹下 宇野 海部内閣	昭和天皇ご逝去、新天皇即位
1990		
1991	海部内閣 宮沢内閣	
1992		天皇・皇后両陛下中国訪問
1993	宮沢内閣 細川内閣	皇太子さま結婚の儀
1994	細川 羽田 村山内閣	
1995		
1996	村山内閣 橋本内閣	
1997		
1998	橋本内閣 小淵内閣	
1999		
2000	小淵内閣 森内閣	
2001	森内閣 小泉内閣	皇太子ご夫妻に愛子さま誕生
2002		
2003		
2004		
2005		

